
smile

刃下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

smile

【Nコード】

N8717Y

【作者名】

刃下

【あらすじ】

絵本作りに奮闘する弟と姉の話

説明と一話目（前書き）

完全にフィクションです。実在しているものとは関係ありません。

説明と一話目

教科書、手紙、離婚届、その他多くの紙媒体が電子媒体へと移行し始めたのは、まだまだごく最近のこと。

某国のお偉い人が頭をひねりにひねって打ち出した資源保全の政策。その名を「ADMP (all digital media plan)」。

アルファベット4文字にして少しかつこよく見せようとしているのがバレバレだけど、要するに木なんて切らずに、デジタルデータで何でもかんでも保存しちゃおうってなところだ。

某国で10年前採択され可決。その2年後に施行されている。

わが国でも追従するような格好で、近年採用が決まった。本屋や郵便局などの反対もむなく、今や多くのユーザーが日常生活でこれを使用している。

とはいっても、商店街を歩けばいかにも年季の入った本屋だってまだあるし、一部では「知ったこっちゃねえ。私は紙を使うんだ」って人もいたりする。当然といえば当然の事だ。

絵本。

これもまた当然の如く、時代の叫りを受け電子媒体への移行をはじめめている。

なんとかpadやなんとかphoneで世界中の絵本を見ることができるようになった。

もちろんのこと日本語に翻訳されていて、値段も紙媒体のときの半分以下の値段で読むことが出来る。

このようにk・・・むがつ・・・ふう。あー、その君、そう君だ。

君にはお気に入り絵本があったか？今でも内容を覚えている絵本があるんじゃないか？

そのお話をだ。四角い箱だかなんだか分からないものを通して見るのは味気ないと思わないか？

紙本来の手触り、ページをめくる時のわくわくが感じられないと思うだろう？

どうだ、寂しいだろ。寂しいと思った君は今すぐにYUカンパニーが出版していr・・・もがっ。

ちよっと、姉さん勝手なことしないでよ！・・・という訳でこんなご時世だろうと紙媒体で絵本を作り続けている僕らYUカンパニー。これはその絵本作りの記録である。



「大和ー、まだ着かないのかよー」

先ほどまで後部座席でぐーすかと気持ち良さそうな寝息をたてていた女がいつの間にか目を覚ましていた。

顔にはタオルをのせ、両足を助手席の頭の部分にのせている。

靴下は脱ぎかけで、服もしわくちゃ、へそ丸出し。これを女性と表記していいものか迷うな。

「まだだよ、うめ姉さん」

「まーだーっかーなーいーのーかー、こーらーんーやーまーとー」

「もう少しだつてば、湖蘭梅姉さん」

「おい、次フルネームで呼んでみろ。足の指を4本にしてやるからな」

僕がバックミラーに目をやるより早く、姉さんは起き上がり耳元でドスの聞いた声をだした。

「はい・・・ごめんなさい・・・」

姉さんはフルネームで呼ばれることを何より嫌っている。

小学生の頃、男の子グループにご飯ウメーと呼ばれていじめられていたらしい。

湖蘭 梅 ↓ こらん うめ ↓ ご飯 ウメー

・・・すごいセンスだ。

始めて聞いたときは、小学生のネーミングセンスよりうめ姉さんがいじめられてたってところに驚いたけど。

「この車がポンコツだから遅いんだろ？はっはっはっ」

そういつて姉さんは持つてきたポテトチップスの袋を豪快にあげ、ぼりぼりとむさぼり始める。

カスが落ちてる・・・ああ、そんな手で窓を触らないで・・・。

こっちの思いとは裏腹に姉さんはまるで自分の部屋かのように僕の愛車を汚しはじめる。

僕は常々思っていた。

この車と僕は生まれる前からの運命で繋がっていて、それを姉さんといえども汚すことは絶対に許されないと！

・・・いや、中古車だけどさ。

免許をとって、これが生まれてはじめての大きな買い物だったんだ。それが姉さんの『弟の物は私の物』というジャイアニズムによって汚されていく・・・。

悔しい・・・けど・・・すっげー悔しい。

ちなみにこの車の前後には若葉マークが燦然と光り輝いている。

「山道の運転難しいんだから、姉さん少しは静かにしててよ」

「山はいいけど、キャストの手配はちゃんとできてんだろうな？」

ははっ、会話が繋がってないだろ？姉さんは僕の発言なんて最初の一文字しか聞いてないんだぜ。

もう慣れたさ。

「うん、ちゃんと現地集合呼んだよ。それに木の刈れる山と桃の流せる川のある場所には今向かってる。万事大丈夫さ。」

それでわざわざこんな糞遠い場所まで運転することになってしまった。

「それならいいけどな・・・、もし何かミスがあれば・・・」

「・・・あれば・・・？」

「お前の体で支払ってもらうからな。」

姉さんは後部座席から身を乗り出すと、僕のほっぺたを舐めながら言った。

説明と一話目（後書き）

感想をお願いします

二話目（前書き）

全部フィクションです。全部関係ありません。

二話目

「姉さん、もう着くよ」

ポテトチップスの袋に片手を突っ込んだまま、文字通り食い倒れた状態で二度寝している姉さんをバックミラー越しに起こす。

姉さんは一瞬だけ薄目を開けた後、すぐくめんどくさそーな顔をした。

んんーっと怒鳴るような声を漏らし、寝返りを打ちながら持っていたポテトチップスの袋を座席の下にぶちまけた。

「なんてことするんだよ、そこは掃除するのが大変な場所なんだぞ！」

「うるへーなー、声がでかいんだよ。手が滑っただけじゃんか。」

「嘘つけ、わざとだろ。姉さんはいつもそうだ。自分で掃除したことがないからそんなことができるんだ。だいたい自分の部屋だって僕が呼び出されて」

「はいはい、うるさいうるさい。わざとやったよ、悪かった。これでいいか？」

姉さんはぶうつとほったをむくらませた。

バックミラーに映る大人に怒られてしゅんとしてしまったときの子供のようなないじけた顔。

こういうところは純粹に可愛いのになあと思う。

なんていうか人によっては守ってあげたい衝動にかられたりするのだろう。

故に我が姉ながら非常に残念である。

なぜ残念なのかといえば、姉さんの場合精神年齢とわがままのレベルまでもが子供だということだ。

一言でいえば姉さんは内面が糞ガキ以下だ。

知っているだろうか。

歯磨き粉が携帯食になるということ。

これは噂でも都市伝説でもサバイバルの知恵でもない。

それはある日の出来事だった。

「うわあ・・・まじかよ・・・」

「はっはっはっ、面白いなこいつ」

弟が買ってきたせんべいを姉が一人で食べ、弟がついだ二つの湯のみのお茶を姉が一人で飲む。

どこにでもある一家団欒の風景だ。

テレビでは男のお笑い芸人が女性タレントの口紅を食べるという芸を披露している。

「あんなものよく食べるなあ、この後絶対お腹壊してると思うよ。

いくらお腹が減っても真似しちゃう駄目だよ姉さん」

「むっ・・・でもこれはこれですごいじゃないか。こいつは遭難しても口紅があれば生きていけるんだぞ。他のやつは食べるものがなくて一人、また一人死んでいく中、こいつは口紅を食べて生き残れるんだ。私は尊敬するな」

「こんな人を尊敬しちゃ駄目だよ姉さん・・・」

そもそも食料を持たずに口紅を持って遭難することなんてあるのだろうか。

すると姉さんは手に持っていたせんべいを一枚ぼりっと噛み砕くと、少し考えて呟いた。

「口紅がいけるなら・・・歯磨き粉だって食べれそうだよな」

「ど、ど、ど、どうかなあ」

そのとき僕はすでに気がついていていた。

ああ、僕は歯磨き粉を食べなきゃいけないんだ。

「見たいなー、歯磨き粉を食べてるところ」

見たいなーとはつまりやれということである。

姉さんは立ち上がり洗面所にあった開けたばかりの歯磨き粉を手に戻ってきた。

「ささっ、ぐぐっといっきにどうぞ」

「全部!？」

姉さんがどうぞどうぞとジェスチャーで勧めてくる。

「遭難してお腹が減ってるんだぞ。たくさん食べなきゃ死んじゃうぞ?」

「でもほら、遭難してるなら節約しないとすぐなくなっちゃ」

「いいから飲め」

その日は下痢が止まらなかった。

「おい、前見ろ、前」

姉さんの叫び声ではっと我に返る。

いつの間にか目の前にカーブが。悲しい記憶を思い出しているうちにトリップしていたようだ。

慌ててハンドルをきる。

「勘弁しろよなー」

大きくため息をついて姉さんは座席の背もたれに倒れこんだ。

「ご、ごめん」

ここは山の中。カーブを曲がり損ねれば崖下にまっさかさまだ。

姉さんが叫ばなければ、本当に遭難するところだった。危ない危ない。

「しょうがないなあ、まったく。じゃあ姉さんはまた寝るから」

そう言って姉さんはおもむろに座席をかたむける。

まだ寝る気か。寝る子よ、これ以上育ってもらうと困るんだが。

主に食費とか食費とか食費とか。

「ちょっと姉さん、もう着くってば」

「んー、あー、・・・ぐう」

この野郎。

「ちょっと起きてよ姉さん」

「うーあー、うーあー、梅ちゃんクイズ! パンはパンでも食べられないパンってなーんだ」

読んでる人はいきなりのことで驚いただろう。

これは姉さんが編み出した、一分一秒でも長く寝ていられるという技である。

相手（主に起こしにいく僕）にクイズを出して僕が答えるまで、寝ていられる時間を稼ごうというものである。

ちなみに出題パターンは3パターンしかないが、答えは無限大にある。

本人いわく頭が寝てるからクイズはとっさにでてくるだけらしい。

「フライパン」

「ぶつぶ」

「パンダ」

「はずれ」

「パンツ」

「ちーがーうー」

「着いたよ」

サイドブレーキをかけて、エンジンを切った。

運転席から降りると、後部座席に回って姉さんを揺り起こす。

「で、結局正解はなんだったの？」

「正解はなし。食べられないパンなんてこの世には存在しない。つまり沈黙が正解。」

「沈黙してたらいつまでたっても起きないだろ馬鹿」

僕は寝ぼけた姉さんを引きずりながら山の中にぼつんと建つ古ぼけた民家へと向かった。

三話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

三話目

舗装のされていないでこぼこ道を車で登ること二時間弱、森の少し開けた場所にぽつんと一軒家が建っていた。

渡されていた鍵で錠を開け、少し重たい引き戸を通して家の中に入る。

中は光が差し込まず、薄暗かった。

僕は窓のところのついたてをはずし、部屋に日光を入れる。

もう建てられて何年の月日が経つのだろうか。

土壁は所々はがれかけていて、いかにも昔の木造の家といった感じ。建っていたというよりは忘れ去られていたという表現が似合いそうな、そんな雰囲気だ。

文化財にでも指定されていそうな外見だが、一年前までは人が住んでいたらしい。

前に住んでいた老夫婦は、二人とも老人ホームに転居することになり、老夫婦の息子が取り壊すのはもったいないと、管理しながらこうしてドラマの撮影会社や、僕らみたいな物好きに安く貸し出している。

「うひゃー、今にも崩れそうだな。これは地震に耐えられないだろう」

そういった情緒が全く理解できない姉さんは早速土壁のはがれかけた場所をほじくり、シロアリの如く古民家の破壊をはじめていた。

「姉さん、崩れたらしゃれにならないからあんまり触っちゃ駄目だよ。」

働かない姉を他所に、僕は車から荷物やら小道具やらを運び出す作業にかかることにした。

作業をはじめて30分ほど。

ドラマの撮影なんかで何度も使用されていたからだろうか。

部屋は少しホコリが積もっている程度で、十分に綺麗な状態だった。

「おい、やまとー。ポテトチップスの袋捨てたいんだけど、ゴミ箱ないのかー？まあいいや、そこらへんに捨てとこっと」

ちよūdまさに今、我が姉に汚される前まではゴミ一つ落ちていなかった。

「姉さん、ゴミはゴミ袋にいれてよ。持って帰るから」

「え、何で持って帰るんだよ。捨てて帰ればいいじゃん」

そう言って姉さんは壁の崩れた場所にポテトチップスの空き袋を詰めはじめた。

僕はいけないと思いつつもその光景をぼーっと眺めながら、どうか姉さんの馬鹿力で壁が崩れませんかようと祈るだけだった。

姉さんに昔、ブロックの塀と塀の間に無理やり詰め込まれて抜けなくなつたあげくレスキューを呼んだときのトラウマが襲ってくるも、それを間一髪のところでは拭い去る。

（しょうがないから、後で僕が取り出して捨てておこう。）

「おじゃま、しますよ」

玄関の引き戸がゆっくりと開いた。

「えっと、来音さんですよ？今日からよろしくお願いします」

僕は戸の向こうに立っていた老人二人に頭を下げる。

「こちらこそ、おねがい、いたします」

おばあさんはそう言って深々と頭を下げ、おじいさんもつられて頭を下げた。

「じいちゃんばあちゃん、今日はよろしくな」

大手を振り上げて姉さんが挨拶をしたところで、またも戸の向こうに来訪者が現れた。

「自分、岩雄です！今日はよろしくおねあいしやす！」

この静かな土地とはミスマッチなほど声の大きい青年が帽子を脱いでお辞儀をした。

見たところ僕と年齢は同じくらい、だが身長は僕なんかより随分と

大きい。

（岩雄くんか・・・主人公役の人かな？あれ、でもそんな名前だったかな？）

「あの、お兄さんのお名前教えてもらってもいいですか！」

岩雄くんは体が大きく、ただでさえ声が大きいため、僕は一瞬ぎょっとしてしまった。

「僕ね、僕は湖蘭大和。後でもう一度しっかり紹介するけど、今は名前だけ。あっちは梅さんで、こちらが来音さん夫妻」

「みなさん、今日はよろしくおなしゃす！」

とても元気のいい青年だ。スポーツマンって感じで爽やか。こちらまで元気になってくる。

しかしなぜか姉さんの顔が曇っていた。

「おい、猿。こっちこい」

うお、なんて直球な。

岩雄くんは何事もなかったように、はいと気持ちのいい返事をして嬉しそうに姉さんに近づいていく。

岩雄くんの顔はこう言ってはなんだが、主人公の顔って感じとは違う気がする。

なんていうか、そう。姉さんの言葉を借りれば顔が猿っぽいのだ。いや、もう・・・これは猿だ。

こればかりは派遣した会社の選択なので、来てしまった今どうこう言ってもしょうがないのだが、履歴書の顔とあまりに違いすぎてだいぶ行く先が不安になってくる。

「・・・」

姉さんは猿に、いや岩雄くんに耳打ちする。

猿くん、いや岩雄もその後、姉さんに耳打ちした。

「あー・・・あっはっは。分かった分かった。そういうことなら大丈夫だ。あっはっはっは」

姉さんは何かに納得すると大笑いしながら部屋の外に出て行った。いったい何だったんだろう。

そうこうしている間に、時計の針はもうすぐ正午を刺そうとしていた。

日が暮れないうちに撮れるところまで撮りたいので、とりあえず来音さん夫妻と打ち合わせをはじめることにした。

二人とある程度話したところで、姉さんが大きな袋を抱えて戻ってきた。

袋から宝物を取り出すかのようにおおげさにカメラを取り出す。

「それでは諸君、撮影に入ろうじゃないか！」

姉さんの眼はキラキラと輝いていた。



三話目にしてとうとう説明する時がきた。

ここに至るまで三話もかかるとは思わなかった。

お前らさっさと絵本作れよと思われたかもしれない。

それはまあいいや。

聞いて欲しいことは一つ。

僕ら兄弟はそろって絵が下手なのだ。

不器用ずぼらな姉さんはもちろん、僕だって人に見せられるほどの絵は描けない。

ならどうするか？

姉さんの頭脳が考えに考えて出した答えがこれだ。

実写でいいじゃん？

逆転の発想でも何でもない。これが僕らに出来る最良の選択。

だから絵本なのに絵は一切使われていない。

姉さんは革新的だと思っているらしいが、説明のところで紙本来の手触りだとか、ページをめくる時のわくわくだとか御託を並べていた人と同一人物の考えだからねこれ。

・ ・ ・ まあ、僕は姉さんがそう言うなら従うだけなんだけどさ。
といったところで三話目終了。四話目に続く

四話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

四話目

「まずは、おじいさんが柴刈りをしているところの写真を撮りますね。おばあさんと岩雄くんは休んでいてください」

僕は二人に声をかけると、すでに衣装に着替えて立派な童話のおじいさんとなった来音のおじいさんと姉さんを連れて、民家の裏手にある森の中へと進んでいく。

数分歩くだけで細い木のたくさん生えた雑木林にたどり着いた。

姉さんは雑木林の地形を確かめるように歩き回り、傾斜の少ない場所に三脚をたてた。

ちなみに姉さんは写真の勉強をしている訳でもなければ、撮るテクニクだって人並み以下だ。

特別、撮るといふ行為に思い入れがあるわけでもない。

その姉さんがなぜカメラマンという重要な役職についているのか。

姉曰く、一万円そこそこしたこのカメラを私ではなく大和が使うなんて絶対に許さない。

そしてこれも姉曰く、大和が5000円以上の物を所持する際は姉に許可をとること。

お分かりだろうか。

僕は常に、重度の過保護に見せかけた姉の呪縛というものを背負いながら生きているのだ。

あの愛車（中古）だって姉さんが便利に使うために許可がおりただけだ。

その前の携帯ゲームだって姉さんに買った次の日奪われるし、通販で買ったエアインマックスだって・・・おっと話を戻そう。

まあ、姉さんも自分から言い出したもんだから一応カメラの使い方を必死になって覚えたみたいだし、カメラのメンテナンスをやらされるくらいのことなら僕は特に文句はない。

姉さんはカメラのセッティングがうまくいかなかったのか、三脚を立てる新しい場所を探し始めた。

手持ち無沙汰になった僕は、衣装のおかげかすっかり後ろの風景になじんだおじいさんに話しかけた。

「ずっと来音のおじいさん、って呼ぶのもなんか変ですよ。失礼でなければお名前でも呼んでもいいですか？」

「・・・」

返事はなかった。

いきなりなれなれしかったかなと少し後悔し始めたとき、

「・・・ええぞ」

とおじいさんは小さく低い声で返事をした。

「ありがとうございます、電太さん。僕のことは大和って呼んでください」

「分かったわい」

またも唸るような低い声が返ってくる。

「おーい、セッティング終わったぞー」

姉さんが別の場所に三脚をたて終え、大きく手を振って呼んでいる。

「それでは電太さん。柴刈りをしているところを写真に撮るんで、この斧を持って振りかぶってもらっていいですか」

僕は持ってきた小道具の斧を電太さんに手渡した。

「この斧は偽物なんで本当に切れることはありません。ですから、木の幹に振り下ろしたところでとめてください。そこを写真でとりますから」

「・・・」

（返事がないけど、分かったのかな。まあこんなおじいさんだけと役者さんだし大丈夫かな。）

「じゃあ撮るぞー、じいちゃん」

姉さんは腰をかがめてカメラに目をやった。

説明中、終始無言だった電太さんは勇ましく斧を振りかぶった。

「では撮ります、3・2・1」

そうだ、忘れていた。

姉さんがカメラマンなら僕の役職は何なのか。

僕は助監督だ。といっても助けるはずの監督はいない。

なぜなら撮るシーン、お話、設定。

大切な事はすべてカメラマンの姉さんがすべて決めてしまうからだ。だから僕は助監督といっても仕事はカメラマンから押し付けられる雑用ばかり。

あとすることと言えば撮る前の打ち合わせと撮るタイミングの秒読みくらいなもんだ。

スパン！

今までに聞いたことのないような音が耳に届いた。

次の瞬間、目の前の木が支えをなくしゆっくりと傾き始め、最後には倒れてしまった。

「すごいな、じいちゃん！」

感嘆の声をあげる姉さん。

「これでええんかの」

電太さんは手に持っていたレプリカの斧を僕に手渡す。

「いや、オッケーオッケー！最高の写真が撮れたよ、じいちゃん。もう最高！」

ハイテンションの姉さんがカメラを三脚からはずしながら、電太さんを褒めちぎっていた。

僕は慌てて渡された斧を注意深く調べてみる。

しかし何度調べても斧は偽物。木が切れるはずがない。

次は倒れた木を調べてみた。

日本刀の居合いで斬られたきゅうりのように、真っ二つに木が切られていた。

「大和くんや、わしはもう帰ってええかの」

「あ、はい。次の出番まで部屋で休んでいてください」

カメラと三脚を持って器用にスキップをする姉さん。

僕は何かしやくぜんとしないまま民家へ戻った。

「次は来音のおばあさん、お願いします」

「はい、はい」

「大和くんよ、わしは少し寝とるけどええかの？」

「ええ、大丈夫ですよ。電太さん。」

「あらら、おじいさん、いつ大和くんと、仲良くなったのかしら。ずるいは、おじいさん、ばかり。私も大和ちゃん、って呼んで、いかしら？私のことは、明宮亜ちゃんと、呼んでくださいな」

「あ、はい……。えっと」

流石に女性を名前で、しかもちゃん付けで呼ぶのは恥ずかしいな。

「明宮亜さんでいいですか？」

「そうね、でもやっぱり、明宮亜ちゃんの方がいいわあくまでちゃんにこだわるのか。」

「それならおばあちゃんでは駄目でしょうか？」

「おばあちゃん……。そうね、大和ちゃんが、それでいいなら、いいわよ」

僕の手をとりながら、微笑み返すおばあちゃん。

「ばあちゃん、大和。もう行くぞ！」

待ちきれずに飛び出した姉さんを追って近くの川へと向かった。

「おい、本当にこの川か？」

「うん……。」

「ものっすごい流れ早いぞ」

「僕もそう思うよ」

「こんな川に流したらあっという間に流れてくぞ？」

「うん……。そうだね」

川は昨日、一昨日と降った雨で増水していた。

川幅は広がり、流れは想像していたのよりもっと早い。

「もうどんぶらこって感じじゃないもんな。ちよっとしたウォータースライダーだぞこれ」

「まずいかもね・・・」

遠くはるばる自作して持ってきたお手製の大きな桃（偽）。
耐水性にする関係でだいぶ重たくなってしまった。

この川ではおばあさんの洗濯シーン、流れてくる桃、おばあさんがその桃を拾うところを写真におさめようとしていた訳だが、色々問題が浮き上がってきた。

運動の勢いとは、これすなわち重さ×速さ。

桃が重ければ重いほど、流れる速度が早ければ早いほど、桃を止める時には力が必要になる。

僕と姉さんは二人で川べりに一人たたずむおばあちゃんに目をやった。

川原の石に足をとられ足どりはおぼつかず、腕も少し力を加えれば今にも折れてしまいそうなほど細い。

下手をすれば交通事故と同じくらいの衝撃がああ体を襲うことだろう。

「やめたほうがいいんじゃないか。私は殺人犯の姉にはなりたくないぞ」

聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。

桃を流して捕まるなんて僕だっていやだぞ。

姉さんは一応カメラのセッティングはしたものの、なかなか判断を下す事が出来ないでいた。

二人の苦々しい顔を見てか、おばあちゃんが近づいてきた。

「ささ、やりましょう」

「えっと、大丈夫ですかね？」

「大丈夫よ、大和ちゃん。私こう見えても力持ちなのよ。家事は毎日やってるからね」

そういっておばあちゃんは上品に笑った。

「だって姉さん。やってみようか」

「分かった。ばあちゃん頑張れよ！」

姉さんは応援の言葉を送り、カメラのレンズを覗いた。

「じゃあまずは洗濯してるところを写真にとりますね」

「はい、はい」

笑顔でおばあちゃんが洗濯のシーンに使う小道具を取りに行く。

「おい、大和」

カメラを覗いた姉さんが小声で話しかける。

「川すげー濁ってんぞ。洗濯っていうかこれ」

先ほども言ったとおり、連日降った雨で水の中は1m先の視界もないほどに濁っていた。

「土砂崩れの映像とかこんな色だよな、ははっ」

と皮肉たっぷりに笑う姉さん。

「姉さんの作った味噌汁もこんな感じだよ。さ、撮っちゃおう」
もうどうでもよくなってきた。

（うわあ、白かった布が一瞬でまっ茶色だよ）

洗濯しているところを撮り終え、僕は急いで小道具の桃を持って上流へ駆け上がった。

「じゃあ、流すよー！」

大声で姉さんとおばあちゃんに合図して桃を流す。

桃はまるで流しそうめんを見ているかのような速さで川を駆け下りていった。

しかし何の偶然か、奇跡か。

うまいこと桃はおばあちゃんの方へと流れていくではないか。

おばあちゃんは桃を逃すまいとジャストタイミングでがっちりと掴んだ

溜まりに溜まった運動量がおばあちゃんに衝撃となって伝わる。

おばあちゃんは少し仰け反ったが、何とか衝撃に耐え踏ん張っている。

しかしその程度では桃の勢いは止まらなかった。

少しずつ力に押され、おばあちゃんが動き始める。

危ないと思ったときには遅かった。

何故か掴んだまま全く手を離そうとしないおばあちゃんは小道具の桃に飛び乗るような格好で桃と共に川の流れに乗ってしまったではないか。

そのまま下流へものすごい速さで下り始める。

「おー、ばあちゃんすげーな」

「姉さん、何見てんの！追って追って！」

姉さんの懸命の走りによりなんとか川の本流に合流する前におばあちゃんを助け出すことが出来た。

姉さんのカメラには悲しそうな顔で桃に乗ったまま川を下っていく来音のおばあちゃんの姿が写っていたという。

五話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

五話目

軽い山登りを終え、戻ってきた姉さんは疲れきっていた。
あたりまえだ。

背中にはおばあちゃんを背負い、手には川の水を吸った特大の桃もどきを持って、川べりを鮭の如く上ってきたらどんな馬鹿でも疲れないはずがない。

「ごめんなさいね、重かったでしょう？」

おばあちゃんは顔にタオルをのせ仰向けに倒れこんでいる、一見すれば死体と見間違えそうな姉さんを団扇であおぎながら申し訳なさそうに謝った。

「いや、・・・ばあちゃんはさほど重くなかったけど・・・この桃いったい何が入ってるんだよ・・・」

息を切らしながら、姉さんは手元にあった桃を軽く叩いた。

パカッという安っぽい音と共に桃が半分に分れる。

そして中からおぎゃあおぎゃあと赤ちゃんが泣きながら現れた。

と言っても、もちろんこれは偽者。ただの人形だ。声はラジカセを埋め込んで流している。こういう小道具作りも姉さんからの言い渡される雑用に含まれている。

写真なんだから音の機能はつけても意味がないんだけど、とりあえず雰囲気作りとしてつけてみた。おかげで桃とあわせてだいぶ重たくなってしまった。

「うおっ。なんだこれ、かっこいいじゃん！すげー高性能！」

姉さんは人形の片腕を掴み、ぶらぶらと揺らしながら、すごいすごいと喜んでいる。

「姉さん、壊れちゃうから優しくあつかってよ。姉さんはそういう小さいものとかすぐ壊しちゃうんだから」

姉さんはただでさえ大雑把で不器用なのに、遠慮やら手加減をしないもんだから、人の物を勝手に触っては壊す癖がある。

あの側らにあるカメラがなぜ今まで壊れず、原型を留めたままではなかったのか。

答えはたぶんあのカメラが姉さんの所有物だったからだろう。

つまり姉さんは自分の物となると繊細にもなるし手加減も出来るのだ。

しかしそれが他人の物となると、やってはいけないということをつ端からやってしまうような悪魔的な姉さんになってしまうのだ。ちなみに奪われた僕の携帯ゲーム機は、奪われた次の日にタッチペンが画面に刺さった状態でゴミ箱に捨てられていた。

「さあ、姉さん。いつまでも人形で遊んでないで次の写真撮るよ」

「おう、そうだな。えっと次は次は・・・」

「おじいさんとおばあさんが桃をわるところだよ」

「ん、分かった。じゃあじいちゃんとはあちゃん、準備してくれ」

姉さんは三脚を使わず、カメラをしっかりと手に持って構えた。

僕は人形を桃の中へ戻すと、二つに割れたレプリカの桃を接合部分に注意してくつつける。

そして小道具の中からおもちゃの包丁を探し出し、それを電太さんに渡した。

「電太さんはこの包丁を上から桃に近づけてください。そこで一枚撮ります。その後こちらで桃を開けますので、出てきた赤ちゃんを抱き上げてもう一枚撮りますね。ここまで大丈夫ですか？」

「ああ、分かったわい」

「おばあちゃんはその後ろで見ていて、そのつど表情をつけてください」

「はい、はい、分かりましたよ」

「それでは一枚目撮ります、3. 2. 1」

シャッター音と一緒にフラッシュが光った。

撮れていなかった時のために立て続けにもう一枚姉さんはシャッターをおろした。

「大丈夫かな、姉さん」

「おう、ばっちしだ。次行くぞ」

「じゃあ少し待っててくださいね」

僕は桃を軽く上から叩いた。

しかし桃はうんともすんとも言わず、ぴくりとも動かない。

あれ、おかしいな・・・もう一度叩いてみる。

その後何度か叩いてみたが桃は一切反応しなかった。

「おい、大和ーまだかよー」

「ちょっと待って姉さん、桃が開かなくなっちゃったんだよ」

「さっきはちゃんと開いてたろー」

「う、うん、そうなんだけど・・・」

接合部分がうまくかみ合っていなかったのかな。

「まーだーかー」

「ちょっと待ってよ、姉さん」

「これを割ればええんか？」

たまらずに口をはさんだのは電太さんだった。

「ええ、ちょっと開かなくなってしまった」

「大和くんや、少しどいとれ」

そういつて左手で僕を桃から遠ざける。

電太さんは手に持っていたおもちゃの包丁を両手で握りなおし、桃に対して一直線に振り下ろした。

スパン

この音を聞くのは二度目だ。一度目は山で目の前の木が倒れる寸前に聞いた。

ずずずっと言う音とともに桃がゆっくりと真っ二つに割れる。

まさにぱっかりという感じで桃が割れた。

「おお、やっぱじいちゃんすげー！」

姉さんはカメラを構えながら切れた桃と電太さんの包丁を写真に写す。

「むかーし、おじいさんはね、軍隊にいた頃、シベリアの山奥で、

自分の身長よりも、ずいぶんと大きな熊を、刀で切ったらしいの。それで、おじいさんには切れないものはないって、周りの人から言われていたの。宮元武蔵の、生まれ変わりなんて、言われてたときも、あったわ。」

おばあちゃんは窓から見える遠くの空を覗き込みながら、懐かしげに語った。

「す、すごい……」

僕も思わず賞賛の言葉を送りながら、桃を覗き込んだ。

しかしそこで喜んでばかりもいられないことに気がついた。

「お・おぎ・おぎい・おぎい・おぎぎぎやぎやぎやぎやぎや」

すっかり忘れていた。

桃の中には赤ちゃんが入っているんだった。

電太さんの包丁は音を出す機材をかすめていたものの、赤ちゃんも桃と同様にまっぷたつにしていた。

姉さんもそれに気がついたのか真っ二つになった残骸の片方を取り出してぶらぶらとぶらさげる。

「こいつの名前決めたよ、大和」

「とりあえず言ってみてよ」

「チャックー。きつと体が半分になっても赤いナイフで追ってくるぜ」

「急いでティファニーって名前の花嫁を用意してあげなきゃね……」

「真っ二つでも寺に収めてくれっかなあ……」

どうかチャックーに危ないものが取り付きませんように。

安らかに眠れチャックー。

ついでに真っ二つにしたのは電太さんだからな。

そこんとこ間違えるなよ。

「いや、ほんとかつこよかったっす！おじいさん！」

後ろでは手に包丁を持ったままの電太さんが、どんな状況でも爽や

かな岩雄くんの褒め殺しにあっていた。

「すまんのう、大和くん。入っとるなんて知らなかったんじゃ」

「いいんですよ、あの場面はこっちで赤ちゃんの写真いれときますんで」

姉さんが簡易手術といって、セロテープで止めたチャックを写真で撮ったものの、どう見ても心霊写真なのでボツにすることにした。

「みなさん、気を取り直していきましょう。次は・・・おっと」

肝心なことを忘れていた。

衣装に着替えるよう岩雄くんに伝えていなかった。

「姉さん、主人公の服どこいった？」

「ああ、あれな。ここだよほら」

そういつて姉さんはひときわ大きな袋の中から衣装を取り出して僕に渡した。

「ごめん姉さん。ついでに岩雄くんにそれ渡しておいてくれない？」

衣装を姉さんに返そうとする。

「何言ってるんだお前」

「へ？何って、だからこの衣装を」

「それはお前が着るんだよ」

「え？」

何の事だか分からず、僕の思考は一瞬止まってしまった。

「主人公役のやつな、私から断つといたわ」

姉さんは口のはしを吊り上げ、いじわるそうに笑った。

「え！？どういこと岩雄くんは来てるじゃないか」

「岩雄は主人公とは違うんだよ、だいたい岩雄は主人公って顔じゃねえだろ」

それに異論はない。ごもつともな意見だが、それでは一体どういうことなんだ？

「だったら誰が主人公役をやるのさ」

「お前しかいないだろ？男で主人公役の年齢のやつなんて他にどこ

にいる？」

あまりのことになかなか頭が回転してくれない。ようやく飲み込めたのは何故か自分が主人公役で写真を撮られる状況にあるということくらい。

「僕？無理だよ。無理無理」

「私は車の中で言ったよな？もし何かミスがあればお前の体で払ってもらうって。払ってもらおうじゃないか。まさに今！」

咄然とした。この人は一体何を言っているんだ。

「まあ、そういうことだから早く着替えろよ。私はお前がその服を着ているところを見たいんだ」

また悪そうな微笑を浮かべながら、姉さんは指で四角をつくり、そこから僕のことを覗いた。

姉さんの見たいとは、すなわちやれ。

こうなると逆らう事は出来ないのだ。

「大変な事になったなあ、だいたいよく考えたらこれって僕のミスでも何でもないじゃないか」

ぶつくさと文句を言いながら、とりあえず衣装に着替える。

ピロリロリ♪

聞き覚えのあるメロディがどこからか聞こえてきた。

(壁の中・・・？)

なおも流れ続けるメロディに耳を傾ける。

あれ、これって僕の携帯の着信音じゃないか？でも、何で！？

「そうだ、わるい大和。大和の携帯電話、壁に詰めちゃった。何だか楽しくなって」

「何でそんなことしたの！？えっと、ここだけ。姉さんがポテトチップスのゴミを詰めてたのは・・・取り出しづらいなあ、もう。んー、よし取れた！もしもし？」

耳元からは何度か聞いたことのある声。

「あ、はい。そうですか、分かりました。お願いします」

「大和、何の電話だ？」

「あれがもうすぐ届くって」

「ああ、ちょうどいいな。それならちゃっちゃと撮ってしまおうか」
姉さんは民家の前に走って三脚を立てにいき、カメラを向ける。

「電太さんとおばあちゃんは玄関の前に立って、手を振って送り出す感じでお願いします」

「はい、はい、分かりましたよ大和ちゃん」

最後に僕はきびだんごと書かれた袋を腰に下げ、カメラの前に立った。

「・・・」

「おい、大和。秒読み」

「僕がやるの!？」

「あたりまえだろ。お前以外誰がやるんだよ」

（自分でやるって恥ずかしい・・・）

「ぐ・・・分かったよもう・・・。それじゃあいくよ、3. 2. 1.

」

六話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

六話目

「はい、では今日中にお電話いただければ回収に伺いますので。ええ、ここですね。はい」

「はい、よろしく願います。ありがとうございました・・・」
ブロロロロ

木の生い茂った深い緑の世界に不快な黒の排気ガスを巻き上げながら、トラックは大小二つのゲージを残し去っていった。

小さい方のゲージからはここに着いた当初からゲージをつつくような音や、独特の鳴き声がひっきりなしに聞こえてくる。

対照的に、大きいほうのゲージは本当に中身が入っているのかと心配になるほど物音一つ立てなかった。

「お、届いた！届いた！」

一旦カメラを置いてきた姉さんが、元旦にお年玉袋の中身を確認する子供のような顔で小さい方のゲージを覗き込んだ。

しかし表情は一転する。

「おい大和、何だこれ」

「鳥・・・だよね」

「鳥って言ったって、こいつは全然違うだろ」

流石の姉さんも言葉を詰まらせたが、ゆっくりと口を開いた。

「こいつはどう見たってニワトリだろ」

「そうだね。正真正銘、何処に出しても恥ずかしくない程のニワトリだね」

姉さんはニワトリと僕、交互に視線を送りながら、どんな表情をしているのか悩んでいるようだった。

「姉さん、怒る前にこれだけは聞いて欲しいんだ。今時、キジなんておいそれと簡単には借りられないんだって。それでさ、僕も困っちゃって業者の人に聞いたんだよ。鳥なら他に何がレンタルできまずかって。そうしたらさ、ペンギンかニワトリだって言うじゃない

か。だったらニワトリの方がまだそれっぽいじゃない？」

「いや、だけどさ。もうニワトリかペンギンの二択なら私はペンギンの方がよかったよ」

「ペンギンは料金が高いからどっち道、無理だったんだよねーははー」

僕はたまらず空笑いを浮かべる。

姉さんは顔を引きつらせながら大きい方のゲージを覗いた。

「お、こっちはちゃんとした犬じゃないか・・・ちよつとでかいなあ」

姉さんは僕が手に持っていた業者からの資料をひったくるように奪い取った。

「えっと、なになに。グレートピレニーズ。名前はスモールか。どこがだよ、すげえでかいぞ」

確かにと思う。何を思っスモールとつけたのか気になるな。

「じゃあ私はこいつら見てるから。それ、岩雄に渡してこいよ」

「うん・・・いつてくるよ」

僕は業者から渡されていた箱を持って岩雄さんの待つ民家へと入っていった。

岩雄さんは休憩時間の間も、熱心に自分の台本を読んでいた。

台本といっても台詞があるわけでもなく、自分の撮影されるシーンが大まかに書かれた程度の物である。

「岩雄くん、届いたよ」

僕はハムスターがひまわりの種を食べる時みたいに体を丸くして台本を読んでいる岩雄さんに、業者から預かった荷物を手渡した。

「あ、はいっす。あり（がとうご）ざいます！」

今まで溜めていた力を解放するかのように、全身全霊で返事をかえず岩雄くん。

「岩雄くんさ・・・こうして聞くのは失礼かもしれないけど・・・大丈夫？」

何を言われているのかさっぱり分からない風の岩雄くんが首をかしげた。

猿っぽい岩雄くんの顔がまさに猿になってしまふ。

「えっと・・・大丈夫、ですか？何がです？」

「岩雄くん、猿として登録されているよ」

どうして今日この場所に岩雄くんがいるのか。

それは主人公役として派遣されたからではない。

彼は猿役として、今日この時間に、ここにいるのだ。

岩雄くんはなんだそのことか、と疑問がなくなりさっぱりとした顔で答える。

「そうっすね、でもこのバイト給料がたくさん貰えるんすよ！」

岩雄くんがそう言って親指と中指と薬指をくっつけ、指でキツネを作った。

（たぶん、お金を表現したかったんだろうなあ）

確かに人間の言葉を理解する猿はどこにいったって重宝されるだろう。

世界には人間が滅んで、猿が王国を作っているような映画もある。

だったら彼は千年に一人の逸材ではないか！

・・・いやいや。その前に彼は人間じゃないか。

熱くなっというてなんだが、人間の言葉を理解するのは当たり前だし。

「まあ、岩雄がいいんならそれでいいじゃないか」

いつの間にかやって来た姉さんが岩雄くんの持っていた箱から茶色い全身タイツを取り出す。

「でもさ、姉さん」

「うるせえ。こいつにも事情があるんだろ。いいからさっさと着替えろよ」

姉さんは全身タイツを岩雄に渡すと手をひらひらと振りながら表に出て行った。

「おい、こいつはどういうことだ」

とりあえず撮る前にお供になるはずの三匹（二匹十一人？）を並べてみる。

「猿が一番それっぽいじゃないか」

興奮状態でゲージから出せないニワトリは論外。

種類はあつてゐる犬だが、真っ白で大きく、やる気がないのかペロを出したまま寝転がって動かない。

「はい、ありがとうございます！いや、ウッキー！」

結果的にカメラマンにお礼の言えるこの全身タイツの猿が一番近づいてしまったのだ。

「おし、いいぞ猿。おい、大和、取ってきたか？」

「う、うん」

僕はさっきクーラーボックスから取り出したばかりのお団子を腰の袋に詰めた。

「まずはそのうるさいニワトリからいくぞ」

「元気のあるうちに片付けときたいもんね・・・」

いまだにゲージの中で大暴れしているニワトリ。

誰が寝ているわけでもないのに鳴きやむことはない。

「大和くんや、少し静かにさせてくれんか。うるさくて昼寝もできやせん」

民家の方から電太さんの声が聞こえてきた。

寝てたか、おじいちゃん。

「姉さん、どうやって写真撮ろうか」

「お前が抱えとくしかないんじゃないか？」

「やっぱりそうか・・・」

正直に言えば怖かった。

ニワトリがじゃない。暴れているニワトリがだ。

僕は緑色の服を着た人が冒険する伝説のゲームで、暴れているニワトリがどんな敵よりも恐ろしいということを知っている。

彼らは何匹も何匹も現れて僕のハートを奪っていくんだ。

恐る恐る近づく僕を見て、ニワトリはより一層暴れ始めた。

「無理だよ、姉さん」

泣き言をこぼす僕を見かねて、姉さんが近づいていく。

「ほーら、ほらほらほら」

おもむろにニワトリの前でトンボを捕まえる時のように指をくるくると回す姉さん。

すると先ほどまであんなにうるさかったニワトリが嘘のように静かになってしまった。

姉さんは豪快に笑いながら、

「はははっ、こいつ馬鹿だ!」

と勝ち誇っていた。

なるほど、馬鹿はこうすれば静かになるのか。覚えておいて、今度姉さんに使おう。

僕は静かになったニワトリを抱え、カメラの前に立った。

そして腰の巾着から団子を一つ取り出す。

途端、さっきまで死んだように静かだったニワトリが息を吹き返し、また暴れ始める。

「姉さん、助けて!」

ニワトリが腕の中で暴れてそこらじゅうに羽が飛び散る。

「もうそのまま撮るぞ! 3. 2. 1」

カシャカシャと何枚もシャッターを切っていく姉さん。

「よし、いいぞ。もういれろ!」

僕はゲージの中にニワトリを投げ込んだ。

「大和、すでに鬼と一戦交えたような格好になってんぞ。あっはっは」

ニワトリの爪で自作の服はところどころ破れ、汗だくになった僕を笑う姉さん。

「よし、このままの流れでパンパンと撮っちゃうぞ」

鬼か、この人は。

リードもつけていないのに逃げ出すそぶりすら見せないスマール。

「おい、お前やる気あんのか？」

姉さんが軽く頭をはたいてもスモールのあごが地面から離れることはない。

「おい、スモウ、スモウ、おい立てスモウ」

すでに名前を忘れた姉さんによって改名させられたスモール改めスモウ。

でかいし、そっちの方が似合ってる気はしなくもない。

「ヨガッヨガッ！」

「それは別人だよ、姉さん・・・」

僕はさっき出したニワトリの団子をスモールの鼻に近づけた。クンクンと入念においを嗅ぐスモール。

いきなりピクンと跳ねると、立ち上がりお座りをしたのだ。

「お、現金なやつだ」

「姉さん、犬って団子食べていいのかな？」

犬にネギやチョコをあげてはいけないとよく聞く。

団子はどうなのだろうか。

「んー、よく知らないけど喉につまりそうだしなあ」

そう言いながらも姉さんは団子をスモールの口元まで持ってくる。パクッ

スモールは一口で団子を咥えると僕たちの手の届かないところまで移動し、口から吐き出した。

そして吐き出した団子を何回かに分けて少しずつたிரらげている。

「お、食べた。大丈夫なんじゃん？」

姉さんは巾着袋に残っていた2つの団子を取り、スモールのところへ持っていく。

「おい、このまま撮るぞ。こい」

そういつて三脚を移動させてカメラのセッティングを始めた。

おいしそうに、少しずつ少しずつ食べるスモール。

「おい、秒読み」

「あ、うん。3・2・1」

カシャ

実に満足そうなスマイルがそこには写っていた。

「ってことで団子はなくなっただけど・・・」
「いいっすよ！」

その後、岩雄くんと笑顔のツーショット写真を撮り、ここに打倒鬼パーティーが完成しましたとき。

七話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

七話目

空がまたたく間にオレンジ色に染まっていく。

日はすでに沈みかけ、森の中がかすかにざわつき始める。

昼頃からはじめた撮影も、そろそろ時間切れのようだ。

初日のノルマだった動物を仲間にする場面までは撮影できたので、まあ合格点といったところだろう。

あとは場所を変え明日いよいよ、鬼の住む島で決戦というシーンを撮ることになっている。

この場面は、お話の中で一番の盛り上がりのあるシーンで、大事なシーンだ。

だからこそ場所選びにもこだわって、わざわざボートを借りて無人島まで行くようセッティングしてある。

「それなら断つといたぞ。」

姉さんはその一言で僕のこだわりを一瞬にして葬り去った。

「なんてことするんだよ、姉さん！明日の鬼の住む島の撮影はどうするのさ！」

「大丈夫だ、明日は撮影しな―い」

「へ？」

姉さんは不敵な笑みを浮かべ、僕のかばんから勝手に拝借してきたスケジュール帳を開いた。

「私たちが今日泊まるはずの旅館。あの旅館の予約をいれたのは誰だったかな？」

「えっと・・・姉さんだよ」

僕と姉さんが宿泊場所の候補を決めていた時のことを思い出してみる。露天風呂がないと嫌だとかマッサージがないと嫌だとか姉さんが駄々をこねたので、旅館の事はすべて姉さんに任せたんだった。後日、日付を決めた後に予約までしてくれたって言うから安心してたんだけど、まさか・・・。

「あれは真っ赤な嘘だ！今日、私たちが予約している旅館なんて世界に1軒も存在しない！」

姉さんは握りこぶしを突き上げながら叫んだ。

「馬鹿、姉さんの馬鹿！なんてことしてくれたんだよ！」

「馬？何を言っているんだ大和。まあ、そう焦るな。私に秘策があるんだ」

しまった、姉さんがまた僕の言葉は最初の一字しか聞こえないモードに入ってしまったている。

「一応聞くよ、秘策って何さ」

姉さんは待ってましたと言わんばかりに上機嫌な顔になり、

「・・・今日、一日で撮り終えてしまえばいいんだよ」

至極当然な事を言った。

言い終えた姉さんは腕を広げ、聞こえてくるはずのない賞賛の声と拍手を待ち続ける。

「それで？」

「・・・それでって何だ？」

「鬼はどうすんのさ」

「ん、そのことか。それも大丈夫だ、ここまで私の計算通りに来ているから」

姉さんはちらっと自分の腕にはめている腕時計に目を落とす。

「じゃあ、私は少し準備があるから」

そういつて話を勝手に終わらせ姉さんは一人で車の方に歩いて行ってしまった。

僕は自由奔放な姉さんが車の中に消えた後も、思考をめぐらせ続ける。

最悪今日は、この民家に一泊だな。

でもこの家はあくまで撮影のためのセットであって、人が泊まれるようにはなっていない。

毛布や布団ぐらいはあるかもしれないが、暖房なんてものは一切なく、隙間風だって容赦なく入ってくる。

山の朝は寒そうだなあ、なんて考えていると部屋の中にいたはずのおばあちゃんが外に出てきていた。

そばに電太さんの姿はない。恐らくまだ中で寝ているのだろう。

「どうしたん、だい？」

おばあちゃんはいわくちやの手で僕の両手を包み込みながら、声をかけた。

「いや、姉さんがめっちゃくちゃして困ってるんですよ」

「へえ、そうなのかい」

おっほっと笑うおばあちゃん。

「それはね、大和ちゃんが、それほどお姉さんのことを、心配しているってことなのよ。喧嘩するほど仲がよい、ともいうでしょ？」

「喧嘩ってほどのことでもないんですけどね。おばあちゃんと電太さんほど仲良くはないですよ」

「あら、そんなことないわよ？ 実は私たち、そんなに仲良くないのよ。家の中でも、あまりお話、しないのよ。夫婦も演じてる、って感じかしらね。」

意外な答えが返ってきて僕は動揺してしまった。今日だけが、はたから見ればとても仲のよい熟年夫婦だと思ったのだが、そういうわけでもないらしい。

「そうなんですか」

「ええ、たぶんあっちも、私のことなんて、もうなんとも思っていないと、思うわ」

僕は少し考え込み、そして口を開いた。

「・・・でもそれは違うと思いますよ」

「あら、そう？ 何故そう思うの、大和ちゃん？」

「だって何でも斬ることのできる電太さんが切っていない縁なんだから、それはすごく強い縁なんだと思いますよ」

僕は思ったことをありのままの言葉で伝えた。

おばあさんはにっこりとした表情を崩さないまま少し黙り込み、
「そうね、ありがとう大和ちゃん」

手をしっかりと握って、同じように微笑んだ。

森の中に二つの光が灯った。

その光はどんどん近づいてきて、車のヘッドライトだと分かったのは車体のすべてがお目見えした時だった。それほどに森は暗闇に包まれていた。

ボタン。

車の扉が開き、男が五人降りてくる。

五人とも見るからに屈強で、黒スーツにサングラスという格好。

まさかこんな山奥でそのスジの人に会うと思っていなかった僕は混乱して言葉が出てこない。

足が小刻みに振るえ、冷や汗がにじみでる。

その時、五人の先頭にいた男が口を開いた。

「監督さんはどこにいらっしゃいますか」

その声からは敵意というか、相手を脅かそうという意味は感じられなかった。

僕はぐくりとツバを飲み込み、乾ききった喉を潤すとなんとかひねり出す様に口から言葉を発した。

「えっと、監督ですか？」

「はい」

この辺りに工事現場はないし、サッカーの練習場だってない。

監督というやはり僕たちの撮影に関係のある監督のことなのだろう。

「とりあえず僕がそうなりますけど」

と言っても助監督だけど。

「ああ、あなたがそうでしたか。これは失礼」

そういつてサングラスをはずし、気さくに握手を求めてくる。

「いやーお若くて気がつかずご無礼を。私こういうもので」

そういつてスーツの胸元から名刺をとり出した。

「あー・・・なるほど。そうでしたか」

真っ黒に塗られた名刺の右上に白文字で悪役事務所と書いてあった。この事務所は怖そうな人を専門に派遣しているところで、この世界ではよく知られている。

こわもての人が多く在籍していて、最近ではスタントにも力をいれているらしい。

今回この事務所には鬼役の人材を頼んでいた。

「すいません。少し待っていてもらっていいですか」

僕は姉さん呼びに車に駆け寄った。

真っ暗で中はよく見えないが、中で何かがもぞもぞと動いている。

「姉さん、鬼役の人達が到着したよ」

そういつて車のドアに手をかけるが、中から鍵がかかっていて開かない。

窓のところをこんこんとノックする。

「開けんな大和、ちよつと待ってろ、殺すぞ！」

中からドスの利いた声が返ってくる。

僕は驚いて真後ろに飛びのき、尻餅ついてしまった。

「おい、今の声って・・・」

「すごい迫力だったな」

「監督にあんな態度をとれるなんて、車の中の人物は何者だ？」

「もしかして本当にそっち系の人か・・・？」

「監督が姉さんって言ってたしな」

「俺たち見かけはこんなだけど本物はやばいよな」

「とりあえず逆らわないほうが良さそうだな」

悪役事務所の人達が口々にあらぬことを言っている。

鍵の開く音がして、姉さんが悠然と登場した。

「姉さん、こちらの皆さんが鬼役の方々です」

「おうおう、諸君。今日はしっかりと頼むぞ」

さっきの演説ごっこがいまいち抜けていない姉さんが大物風を気取った挨拶をする。

（間違いない、彼女はソツチ系の人だ）

鬼役の方々はお互いに目で合図をして確認をとりあうと、

「あねさん、今日はよろしくおねがいます！」

大きな声で挨拶をした。

「おお、元気じゃねえか。こちらこそよろしくな」

いつの間にか姉さんは鬼たちの心を完全に掴んでいた。

「つつこむの遅くなったけど、その格好なんなの」

「何ってなんだよ」

姉さんは小道具の中にあつた金棒を持ち上げ、背中手の届かない場所をかいている。

「その衣装のことだよ。競艇？」

「何言ってるんだよ。この格好見れば分かるだろ。今から私は鬼だ」
全身黒タイツで、トラ柄のパンツをはき、頭には鬼の角のついたカチューシャをしている。

「やっぱり姉さんの本当の姿は鬼だったんだ！」
昔からこんな残虐な人が人間のはずないと思ってたんだ。あと何回変身を残しているんだろう。

「違うわ、馬鹿。それよりよく見ろ、どこからどう見たって完璧な鬼じゃないか？我ながら惚れ惚れする鬼っぷりだ」

鏡を振り回しながら色んな角度から自分を映す姉さん。

まあね、あなたの配下の鬼たちに比べれば姉さんはずっと鬼らしい鬼だよ。

つい先ほど到着した姉さんの配下である鬼を演じる悪役事務所の人達はサングラスにスーツ姿。

鬼らしいところといえば、姉さんが画用紙とテープで作った鬼の角を頭につけているところぐらいなものだ。

悪役事務所に連絡するところまではできた姉さんも、鬼役の衣装が外部発注だったことまで頭が回らず、このような奇怪な鬼たちを作りあげてしまった。

「あねさん、お茶をどうぞ」

「おう」

いつの間にかボスらしい立ち回りも身についた姉さんが、配下の鬼から受け取ったお茶をずずっと喉に流し込む。

「それよりもう外真っ暗だよ。こんな暗さじゃフラッシュたいたつて無駄でしょ、撮影どうすんのさ」

「暗いなら家の中で撮るしかないだろ」

「え？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

確かに家の中なら持ち込んだ照明機材で、撮影できる明るさくらいにはなるかもしれない。

でも、

「鬼が家の中にいるの？」

そんな馬鹿な。

「鬼の方から攻め込んできたってことにすればいいだろ」

なんてご都合主義。

姉さんの頭の中のストーリーでは、鬼が一市民による鬼退治の計画を嗅ぎつけ、わざわざ敵の本陣まで出向いたとでも言うのだろうか。なんて情報戦に長けた鬼なんだ。

「そんな簡単に改変していいの？」

「しょうがねえじゃん。外暗くて取れないんだし」

姉さんはまったく悪びれるそぶりもない。

「姉さんが鬼役として出るんだったら、誰がカメラ撮るのさ。僕も無理だよ？」

だって主人公だし。姉さん率いる鬼たちを実家で迎え撃たなきゃいけないし。

「タイマーで連写撮影だ、それでいこう」

姉さんはぽんと胸の前で手を叩き、さっさとカメラをいじりはじめる。

本当に適当だなあ。

「じゃあちよっと準備するから待ってろ」

意気揚々とカメラのセッティングを開始した姉さんだったが、連写機能とタイマー機能、いきなり二つを相手することになりだいたいぶてこずっているようだ。

「大和さん、大和さん」

ぼーっとしていた僕に岩雄くんが突然話しかけてきた。

「やばくないですか、梅さんの格好」

岩雄くんは悪戦苦闘する姉さんを見ながら頬を赤らめている。

「何が？」

「ほら見てくださいよ。胸とかぴったりくつついて。梅さんってすごい巨乳じゃないですか。」

そう言われてもう一度姉さんの方を見る。ああ、確かに。姉さんは性格は悪いがスタイルは弟の僕から見てもいいと思う。出るところ出てるし。さらに、全身タイツだから体のラインがくつきりでてしまっている。

確かにあれは反則的だ。

「岩雄くんは巨乳が好きなの？」

「巨乳がいいですねー。僕はよく海外に行くんですけど、梅さんの外国人並にでかいですよ」

岩雄くんは嬉しそうに語った。

「そういえば大和さん。大和さんはずっと梅さんのことを姉さんと呼んでいますか、もしかして大和さんと梅さんって姉妹なんですか？」

「ああ、そういえばちゃんと紹介するって言ってまだしてなかったね。まあ一応姉妹だよ。性格も何もかも違うけどね」

「え！やっぱりそうだったんですか？うわー、大和さんのお姉さんなのに失礼なことを言ってしまったなー」

岩雄くんは独り言のように自分のミスを責めはじめた。

自分の姉をそういう目で見られるとだいぶ引く。

しかし僕の中で猿として登録されていた岩雄くんはすでにこれ以上離れることの出来ない距離まで離れているのでこれ以上引く事はな

い。

「失礼ついでに言いますけど、全然似てないですね」

全然失礼じゃないぞ岩雄くん。その通り全く似てないんだ。僕は似てはいけないんだ。

「おっし、テストいくぞー」

岩雄くんと喋ってる間にセッティングを終えた姉さんが声を上げた。

「えっと確か大和さんの苗字が湖蘭だから・・・湖蘭梅さんかー」

「あっ」

まずいと思ったときには手遅れだった。その辺の説明を全くしていなかった。

「おい、猿なんか言ったか」

顔を伏せた姉さんが岩雄くんに少しずつ近づいていく。

「あ、えっと。大和さんと姉妹ならフルネームは湖蘭梅さんなんだなーと。」

この辺で岩雄くんも空気がおかしくなったことに気がついた。しかし遅すぎた。

まあ、でかい声で二回も言ったら聞き間違いでは、すまないわな。

「だれがご飯ウメーだあああああああああ」

逆上して鬼神とかした姉さんは岩雄くんを間髪いれずに殴り飛ばした。

「あり（がとうご）ざいまあああああああああす」

岩雄くんはまるで重力が横を向いたのではないかと思うくらい軽々と吹き飛び壁にはりついた。

「姉さんやめて！」

壁が、土壁が崩れる！弁償できないよ！

壁にぶつかってもなお、重力に逆らいながら浮き続けていた岩雄くんがとうとう、ずるずると壁伝いに床に落ちた。

一目で分かる。意識はない。

「お前もだ大和ー」

姉さんは気を失っている相手は襲わない。

なぜならそれ以上やれば相手が死ぬからだ。

しかし当然この程度では怒りの収まらない姉さん。

その怒りの矛先は僕に向いた。

「僕は何も言っていないじゃないか！」

「モウマンターイ！」

そこは問答無用だよ、姉さん。とつつこんでいる暇はなさそうだ。

「ほーらほーら姉さん」

僕は先ほど知った馬鹿を止める方法を実践する。

トンボを捕まえる時のように指を姉さんの眼の前でくると回す。
当然それを見た姉さんは、

「なんのつもりだおらあああああああ」

そりゃそうだよね。

僕もあえ無く、ボコボコにされました。

その後の写真には対決する前から立っているのがやっとなほどの怪我を負った主人公と意識なく壁に叩きつけられている猿。

家の中に動物をいれる訳にもいかなかったので犬とニワトリの姿はない。

寸前の暴力事件を見て顔面蒼白になったスーツ姿の鬼を従え高笑いをかます姉さん。

その光景を見てなお微笑みを忘れないおばあちゃんと、我関せずと普通に眠ったままの電太さん。

散々な写真ばかりだった

◇

「姉さん、それ以上は！岩雄くんが死んじゃうよ！」

「おい、起きろ大和」

「はっ 夢か」

まさか岩雄くんが姉さんに12回体を畳まれて壁に埋められる夢を

見るなんて。

「で、どうだった 今回の本の売れ行きは」

「当然いまいちだよ。それでも少しは売れてることのほうに驚きだね」

「いやー、好評だったぞ一部には」

「一部ってどこさ」

「ひなた」

「あー、そっか。・・・ならいいか」

「ああ、オールオッケーだ」

「・・・って全然オッケーじゃないよ！来月の食費どうすんのさ！」
「心配すんな」

姉さんは大きなダンボールを二つ、ドアの向こうから持ってきた。
一つ目のダンボールを開ける。

中には気持ち悪い色の果物がつまっていた。

「これは猿雄から。あと三箱これがあるぞ、南国の果物だってよ」
おいしいけど、名前が違うぞ姉さん。

「なんで岩雄くんからそんなところの果物が届いたの？」

「なんか旅すんのが趣味らしいぞ。」

なるほど。岩雄くんは今現地にいるのか。

へえ、猿顔の岩雄くんが旅ねえ。

猿岩・・・

「ロバ連れて旅してそうだよな」

「姉さんそれは別のコンビだよ」

もう一つの箱はなんだろう。

「じいちゃんとはあちゃんからだ。息子の会社の試供品だってよ」
じいちゃん・・・ああ来音さん夫婦のことか。

「大和ちゃんにだってよ、よかったな」

「ああ、うん」

中を覗いてみると箱いっぱい新製品の歯磨き粉が詰まっていた。

「じいちゃんたちがくれたんだ残さずに全部食べるんだぞ」

「分かって・・・え？」

「姉さんは大和がこれ全部食べてるところ見たいぞ」
姉さんは豪快に笑った。

七話目（後書き）

1 話目おわり 2 話目につづく

2、一話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、一話目

「姉さん」

「何だよ、うわっ顔怖い。どうした大和」

「どうしたじゃないよ。何であいつがここにいるのさ」

「何でって、呼んだからに決まってるじゃん。今回の撮影は必要だろ、女の子」

「だからって姉さんは何でよりによってあいつを呼んだのさ！」

話はまず二週間前にさかのぼる。

・
・
・

僕が初めて出演した絵本が発売され二ヶ月。

町では以前よりも多くのシャッターを降ろした本屋さんを見かけるようになった。

僕はそれでも負けじと続けている数少ない書店をまわり、どうにか本を置かせてもらえるよう交渉する毎日を送っていた。

しかし現実は厳しい。

「こんなもの置く余裕はない」だとか、「絵本のくせに子供に見せられない」、「鬼の子の写真集なら置いてもいい」など、ごもつともな意見と共につき返されることがほとんどだ。

それでも根気よく交渉を続け、少しずつだが置かせてもらえる書店も見つかった。

そんな時にまた、姉さんのわがままが始まった。

「よし、次の作品を撮るぞ」

姉さんはベッド代わりに使っていたソファから飛び起き、開口一番叫んだ。

「何か言った？姉さん」

いつもの持病の発作なので僕は聞こえないふりをして軽くあしらう。

「大和、私は決めた。次の作品を撮る」

「あ、そう。姉さん頑張って」

「次の作品をとーるーぞー、やーまーとー」

姉さんを見無視し、ディスプレイを覗き込みながらキーを叩く。

「・・・」

「やーまーとー」

「・・・」

「や・ま・と、お・ね・が・い・ハート♪」

「駄目に決まってるだろ、姉さん」

姉さんの甘ったるい声に耐え切れなくなった僕はしょうがなく口を開いた。

「前の本を出してからまだ二ヶ月しか経ってないんだよ？新しい本を出すには少し早いよ姉さん」

「うん、でも大丈夫」

馬鹿な姉さんのために、分かりやすさを心がけて説得する僕。

しかし姉さんからは何の根拠もないくせに自信に溢れた言葉が返ってくる。

「それにこう言ったらなんだけど、前の本は鳴かず飛ばずで在庫がまだあるんだ」

僕は部屋の隅にあるダンボールから紙束を一つ取り出しながら続ける。

「今はこれを少しずつでも置いてくれる店を探した方がいいんじゃないかな」

我ながら馬鹿でも理解できる、いい説明だ。

これで流石の姉さんだって分かってくれたはず。

しかし普通の馬鹿のさらに上を行く姉さんは僕の手から自分の作った絵本を取り上げると、

「こんなもん知るかー！」

といって本を床に叩きつけた。

「何すんのさ、姉さん。これ一応売り物なんだよ！」

「うるさい！私はこんなもの知らん。私は次を撮るんだー！」
言い出すと自分のわがママが突き通るまで、ごね続ける姉さん。

「だいたい姉さんは自分のしたいことしかないじゃないか。スケジュールの管理だって僕にやらせるし、役者の手配や場所をおさえるのだって僕じゃないか。あげく前回はそのスケジュールだって勝手に変えちゃうし・・・」

「大和、ごちゃごちゃうるさい！」
そういつてムエタイの選手ばりの蹴りを僕のお尻に叩き込んだ姉さん。

「痛い！手をあげたな、姉さん！」

「手は上げてない！」

感情的になった姉さんに言い返しは通じない。

「悔しいなら口で言い返せばいいじゃないか、なんですぐ蹴るのさ！」

「うるさい、お前・・・口臭が爽やかなんだよ！」

「それは姉さんが歯磨き粉を食べさせたせいだろ。おかげで僕はずっと下痢だよ」

ダンボールいっぱい歯磨き粉を消費するのに、毎日一本ずつ。二ヶ月間もこの生活が続いた僕の息は朝昼晩ずっと爽やかになってしまい、代償としてお腹がゆるくなった。

「だから私が薬買ってきてやっただろ」

「いつきに一瓶飲ませようとする馬鹿に殺されかけたよ」

絶対マネしちゃ駄目だぞ。

「くー・・・じゃあ私が全部用意したら撮っていいんだな！？」

「姉さんには無理だよ。あのまぬけな鬼たちの衣装を思い出してみなよ」

「こんちくしょー！」

姉さんは言葉で追い詰められると精神と言葉の年齢がぐっと下がり、攻撃も単調になる。

間髪いれず飛んでくる姉さんの手刀をひらりと避けた。

このくらいなら姉さんの攻撃でも避けられる。

しかし避けた先で机で腰を強打した。

「あで」

「やってやるー、うわあああああん」

号泣しながら姉さんは扉を開けて出て行ってしまった。

少し言い過ぎたかなと思ったが、こういう姉さんの急な思いつき自体はよくあることで、僕は特に気にはしていなかった。

だいたい姉さんの思いつきは企画倒れで実行にうつされることはま
ずない。

しかし実のところ今回の姉さんは違った。

姉さんは僕の知らないところで本当に準備をしていたのだ。

そして今日、知らぬ間に計画されていた撮影の日を迎えた。

ちなみに僕がこの撮影について、姉さんから聞いたのは早朝のこと。
もちろん何もしらず寝ていた僕は、いきなり姉さんに叩き起こされ、
寝ぼけている間に車に乗せられた。そして、気がついてみればこの
竹やぶに連れてこられていた。

もう誘拐だろ、これ。

姉さんから台本を受け取り、中をぱらぱらと開く。

「姉さん、ちなみに僕はこのお話に出てくるの？」

「当たり前だろ。前が好評だったし、今回も出すぞ」

「一部にね」

「ああ、ひなたにな」

で、なんやかんやありながらも一人の出演者と顔合わせ。
そこでようやくこのお話の最初に戻る。

・
・
・

「何でここにかぐやがいるのさ」

「ひゃえっ！」

少女は兄弟喧嘩の途中で、自分の名前がでてきたことに驚き、ぴくんと跳ね上がった。

僕はその様子を横目で見ながら、少女を指差して姉さんを問い詰めた。

「もしかして姉さん、名前がかぐやだから呼んだの？」

「おう」

姉さんは全く表情を変えず、堂々と、当然のように言っただけだ。

「選考基準は？」

「女でかぐや」

「・・・だけ？」

「おう」

呆れた。

僕は急に激しくなった頭痛と腹痛に顔を歪める。

「お、お久しぶりです、大和くん・・・」

少女は涙目になりながらも、僕の正面に立ち挨拶をした。

紹介しよう。

彼女は僕の幼馴染の菊池かぐや。

菊池家とは親同士の仲がよかったため、子供同士でよく遊んでいた。主に姉さんが。

女同士気でもあったのか、あるいはあの姉さんと仲良くなれるほど馬鹿だったのかは知らないが、姉さんはかぐやのことを小さい頃から可愛がっていて、かぐやにとっても甘い。

僕はといえばかぐやが嫌いだった。

姉さんに蛙をパンツの中に入れたこともない。

姉さんに鼻でガムを噛んで膨らませるまで、押入れに閉じ込められたこともない。

雷雨の中、鉄のフライパンを持たせられ、外に立たされたこともな

いかぐやが、姉さんに可愛がられているのが小さい頃の僕には納得ができなかった。

だから僕は姉さんに叩かれた腹いせをかぐやにしていた。

と言っても昔から腕っ節の弱かった僕は、かぐやによく悪口を言った。

しかしかぐやはほとんど喋らないし、僕が何を言っても笑っていた。でもそんなある日、僕はかぐやを泣かした。何を言ったかは覚えていない。そして僕は飛んできた姉さんに川原の石を高く積むまで殴られた。

その日から僕はかぐやを避け、そして全く遊ばなくなった。

親同士の交流もなくなり、かぐやにあったのは中学生の時以来だ。

僕はかぐやをきくと睨み、挨拶を返さない。

「出演料もいらなんて言ってくれてるんだ、文句ないだろ？ お前から一緒に出るんだから少しは仲良くしろ」

姉さんが僕の肩を掴みながら言った。

「・・・よろしく」

僕はかぐやの顔を見ないように挨拶を交わし、さっさと車に入って衣装に着替えた。

2、二話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、二話目

青々と育った竹が天に向かってまっすぐと伸びる。

風が吹くと揃って左右に体を揺らす姿は何か神秘的な感じだった。

「なるほど、僕はおじいさん役か」

渋い茶色の衣装とご丁寧に白髭とかつら。

僕にあそこまで言われたのがそれほどまでに悔しかったのか、姉さんはちゃんと準備をしていた。

外に着替えのできるような場所はなかったので、しょうがなく車の中で着替える。

朝、人の安らかな睡眠を妨害してくれた姉さんにいちゃもんの一つでもつけてやろうかと思ったが、車が狭くて多少時間はかかったものの、サイズもぴったりで衣装については文句のつけようがなかった。

姉さんが着替えてでてきた僕を見て、満足げに笑った。

「はっはっはっ、サイズもちょうどいい感じだな。似合ってるぞ、

大和」

「僕もびっくりしたよ。姉さんやればできるじゃないか」

「いやいや、私なんかより大和の方がすごいよ。前の衣装といい何でも似合うじゃないか。ほんと何着せてもかっこいいなあ」

おじいさんの衣装が似合うってのは、少し「ん？」と思うがこれも姉さんなりの褒め言葉なのだろう。

「どうしたんだよ、姉さん。恥かしいなあ。」

「これほど写真写りの神様に愛されている男はいないぞ。どの角度から見てもすげーイケメンだ」

そういつてカメラを覗きながら、僕の周りをくるくると歩きまわる姉さん。

「ははっ、本当にどうしたの姉さん。そんなに褒めても何もでないよ」

「えっ・・・」

元気だった姉さんが急に静かになった。

手足をわなわなと震わせ、視線が空中を彷徨っている。

「・・・姉さん、正直に言って。何したの」

「その衣装、後払い・・・。私、お金ない・・・どうしよう大和」

姉さんは両手を僕の肩に起き、がちがちと歯を振るわせた。

「どうしようどうしよう、早く逃げないと大和。どこか誰にも来ないような山奥へ」

「いや、衣装の代金なら会社のお金で出すけどさ・・・」

「あっ、そっか」

姉さんはふうーとため息を吐き出し、安堵の表情を浮かべた。

しかし僕には安堵できない懸案が一つ。

「・・・姉さんもしかして僕に払わせようとしてた？」

「いや、別に」

「姉さん、嘘をついたら馬鹿になるよ」

「ぐっ・・・」

姉さんは馬鹿のくせに今以上に馬鹿になることを嫌っている。

「さあ、どっち？」

この後の姉さんの行動パターンは二つ。

「ごめんなさいいいいい、嘘つきばしたああああ」

と言って号泣しながら謝るパターンが一つ。
もう一つは、

「うるせえ、馬鹿大和おおおお」

と言って逆切れしながら殴りかかって事をうやむやにするパターン。
果たして姉さんはどちらの行動をとるのか。

「うるせえ、（省略）
後者でした。」

一方的な暴力でなかったものになった僕の疑問を置き去りにして、姉さんと僕、ついでに何故か撮影シーンもないついてきたかぐやの三人で竹やぶの奥へと入っていく。

「おい、大和。笹だ、食ってみろよ」

姉さんは頭上に無数にある笹の葉を一枚、引きちぎって僕に渡した。「僕はパンダじゃないんだから食べられないよ。それにどちらかと言えど僕より四六時中ゴロゴロしてる姉さんの方がパンダに近いでしょ」

「大和、お前の顔にパンダみたいなあざつくろぞ？」

「・・・ごめんなさい」

姉さんとの口喧嘩は口喧嘩から最後には脅しになるから勝てたためしかない。

「つぶ」

少し後ろを歩いていたかぐやが思わず噴出した。

「・・・何笑ってんだよ」

小さい声でぼそっと呟いた。

「あ・・・えと、ごめんなさい」

かぐやは謝りながら顔を曇らせた。

「馬鹿、仲良くしろって言ったろ」

そういつて姉さんは僕の頭を軽くこずく。

「・・・」

その後、気まずい空気のまま数分歩き、少し開けた場所に出たところで姉さんが足を止めた。

「よし、ここでいいだろう。うひゃーたっかいなー」

姉さんは一際背の高い竹の頂上を見ようと、首を傾けて空を見上げた。

「姉さん、ここではどんなシーンを撮るの？」

「ああ、えっとなー」

姉さんは背負っていたリュックサックから台本を取り出しながら、

「えっと、竹を切ってる大和と光ってる竹。それと竹の中にいる赤ちゃんを見つけるシーンだな」

姉さんは台本を閉じると、またリュックから物を取り出した。

「はい、これはのこぎりと細い枝を切るような鉋だ。んじゃまず大和が鉋で竹を切っていると撮るぞ」

「姉さん、これで本当に切れるの？」

持ち上げた鉋を少し振ってみる。

「おい、気をつけろよ。それ本物なんだから。本当に切る必要はない。切ってるところを撮る」

「なるほど」

そういつて僕は手に持った鉋を竹に思い切りよくつきたてた。

「よし、それで待ってろ」

姉さんは急いで三脚をたて、カメラをセットした。

「おし、大和秒読み」

「うん、3・2・1」

シャッターが降り、今日一枚目の写真がデータになって映し出された。

「ん、オッケー。じゃあ次光る竹」

姉さんはまた手ごろな竹を探し始める。

「姉さん、どうやって竹を光らせるの？」

「ああ、待ってろ。秘策があるんだよ」

姉さんは青いロボットがポケットから道具を取り出す時のような効果音を口で出しながら、リュックから懐中電灯を取り出した。

「テラスタメノライトー」

「ライトってそういう物だよ」

姉さんのモノマネが似てないことはさておき、それをどう使う気なのだろう。

「This is in bamboo」

どうやら竹の中に懐中電灯をいれて光る竹を作り出らしい。

ちなみに姉さんは学生時代、すこぶる英語ができなかった。

それなのに使いたがる辺り、やはり馬鹿だと言える。

「どうやって中にいれるのさ」

「I don't know」

いつもの姉さんよりもいらつとくるな。

姉さんは外人風（姉さんの勝手な想像）の悩み方として、ありもしないヒゲを指でこすりながら考えている。

「Yamato, help me」

早々に根をあげた。

いらつとしたので助けないことにする。

「I can't help you」

ちなみに僕にも姉さんと同じ血が流れている訳で、英語は出来ない。

「助けて、かぐやー」

姉さんは僕を諦め、かぐやに泣きついた。

「えっえっ。ど、ど、どうしよう」

かぐやはおろおろと慌てふためいている。

「かぐやー、お姉ちゃんを助けてー大和がいじめるー」

ぐりぐりとかぐやの胸に顔をこすりつけ甘える姉さん。

それを見ていると、そろそろ助けてやるかという気分になった。

「姉さん、そこは竹だけ撮って後で合成しよう」

「そうだな、なんで早く言わないんだよ大和ー」

姉さんは嬉しそうに三脚をたてて、光っていない普通の竹を撮った。

「おし、オッケー。じゃあ私はもっと竹林の写真撮ってくるから大和はこれで竹を斜めに切っというて」

そう言って姉さんからのこぎりを手渡される。

「気をつけて切るんだぞー、じゃ後は任せたなー」

のんきに鼻歌を歌いながら姉さんは竹やぶの奥へ消えていった。

その場に残された僕とかぐや。

かぐやは気まずそうな顔で、そわそわとして落ち着きがない。

「かぐや、切れよ」

昔のように命令口調で言ってみた。

「あ、うん。分かった」

かぐやは僕の言葉に従い、女の子の手には似合わないのこぎりを持って切り始めた。

「うんしょ、あれ・・・硬いね」

かぐやは顔を上げて微笑みかけるが、僕は表情も変えないし返事もしない。

「うんしょ、うんしょ」

何分続けても、いつこうにのこぎりの刃は前に進んでいかない。

かぐやは前髪ををかき分けながら、一生懸命に手を動かしていた。

汗の雫が一滴、かぐやの顔の輪郭をつたって地面に落ちた。

それを見ていた僕は何故だか無性にいらいらしてきた。

「代われよ」

「え？」

かぐやは驚いた顔で僕を見た。

「遅いからだ、姉さんが帰ってきたときに終わってないと写真撮れないだろ」

「あ、そうだね。・・・ありがとう大和くん」

僕はのこぎりをかぐやの手から奪いきり始めた。

「・・・んで何で切れてないのさ」

帰ってきた姉さんは呆れながら僕に向かって言った。

「すっごく硬いんだよこれ」

泣き言を言うようだが本当に硬い。男の僕でも全然無理だった。

「大和くんは頑張ってくれたんだけどあのね、お姉ちゃん」
フォローをいれようとするかぐや。

「ちよつとどいてろ」

姉さんののこぎりではなく鉋を両手で持ち、かまえた。

「確かじいちゃんの構えはこうだったかな」

姉さんの言うじいちゃんとは電太さんのことだろう。

「はっ」

姉さんはものすごい速さで鉈を斜めに振り下ろした。すっぱりと竹が斜めに切り落とされる。

電太さんのような音は出なかったものの、見ただけでここまでできるようになるのか姉さん。

我が姉ながら恐ろしい。

姉さんは鉈を下ろし、リュックからある箱を取り出した。

その箱は何重にも紐で縛られていて、よく見ればおふだのような物が貼ってある。

「姉さんこれ何さ」

僕は箱を手にとり、よく見ようと顔に近づけた。

「おぎぎぎぎ、ぎぎ、、、ぎぎ、、ぎゃあ」

びっくりして箱を投げ捨ててしまった。

「これまだ持ってたの」

「いや、使えるかなって思って」

「姉さん、これはもう燃やすなりお寺に持っていくなりしようよ。赤ちゃんは僕が合成でいれとくからさ」

「うん、分かった。そうする」

姉さんは箱を拾って何事もなかったかのようにリュックにおさめた。

「よし、これ撮ったら次行くぞ」

手でカメラをしっかりとつかまえる姉さん。

「大和、秒読み」

「3. 2. 1」

「あっ、今撮りながらすげー面白いジョーク思いついた」

「聞かせてもらうよ」

「今、私カメラで竹を撮ってるじゃん？これが本当の竹撮り物語ってね、H A H A H A」

僕は笑い続ける姉さんを置いて無言で車へと戻った。

2、三話目（前書き）

全部フィクションです 全部関係ありません

2、三話目

車を走らせること数十分。

ちらほらと民家が見えるようになった。

道路も車が一台しか通れないような道から二車線に変わり、山を崩してつくった町のような場所に出た。

少し走ると洋風の家や、コンビニなんかも建っているのを見かけた。姉さんに教えられたルートだと、目的地はどうやらこの町の奥。

周りより少し高い丘の上へ向かっているらしい。

「よし、ここだ。止める大和」

姉さんは後部座席で前がかりになり僕に指示を出す。

止めるも何も、走っていた道は最後には一本道になり、その道もここで行き止まりだ。

よって僕たちには止まる以外の選択肢がない。

僕はブレーキを踏み、車を止めて外に出た。

「姉さん、ここなの？」

「そうだぞ、次はここで撮影する」

僕は目を丸くしながら目の前にそびえたつ建築物の全体像を必死につかもうとする。

「姉さん、これ本当に借りられたの？」

「ああ、借りられたぞ。どうだ、驚いただろう」

姉さんはえっへんと胸を張って自慢する。

「驚いたけどさ、本当に大丈夫なの？僕は嫌だよ、あとから無許可だったなんてオチは」

「なんだよ大和、素直に褒めろよ。ちゃんと許可だってとってあるって」

「ならいいけどさ、よくこんな場所、姉さんが借りられたねえ」

それはまるで武家屋敷。屋根一面にびっしりと敷き詰められた多くの瓦は見ていて壮観だ。

家の前にはずっしりとかまえた門が硬く閉ざされている。

「昔の知り合いにちよつとな。よし、行くぞー皆のものー!」

姉さんはまるで將軍が隊を動かす時のような仕草で手をあげ、僕たちを先導した。

そして大きな大きな門の前に立つと、両手でゆつくりと押し始める。門はぎぎぎという地面と木がこすれるような音がするものの、微動だにしない。

それでも姉さんは押し続けるが、人が通れるほど門が開く事はない。「ぐぐぐ、すげー重いぞ、この門。どうなってるんだ」

姉さんは足を踏ん張らせながら両手で押し続けるが、いっこうに前に進まない。

姉さんの馬鹿力でも開かない門があるなんて、少し驚きだ。

「鍵はかかってないの?」

「いや、開いてるはずなんだがなあ・・・ちよつと本気で押してみるか」

姉さんは一度押すのをやめ、力を緩めた。

そしてその場から一、二歩下がった場所から力を込めて思いっきり押す。

門のそこかしこから木の軋むような音が聞こえた。

「あわわわわ」

ぱらぱらと落ちてきた木屑を見て、かぐやが慌てる。

僕も流石におかしいと思い、

「姉さん、もしかしてこの門は押すんじゃないくて引くんじゃないの?」

「え? 何んだって、そんな馬鹿な・・・」

姉さんは門の少しだけ凸凹した場所に指をひっかけ、軽くこちらに引いた。

門は簡単に開いた。

「引っ張れるように持ち手がついてるじゃないか」
やはり姉さんはそんな馬鹿だ。

なににせよ姉さんの馬鹿力で門が壊れなくてよかった。

僕たちはようやく開いた門をくぐり、屋敷の鍵をあけて玄関から部屋へあがった。

「うわあ、すごいなあ」

家の中にも、高そうな壺や掛け軸がそこら中に飾られている。

庭の木も丁寧に手入れされていて、池には綺麗なオレンジ色と白の鯉が優雅に泳いでいた。

「綺麗だなあ」

ぱくぱくと口を動かしながら静かに泳いでいる鯉をみると無性に心が落ち着く。

「こどもの日までは首位か二位くらいのところにいるのに、最後は絶対五位なんだよな・・・」

姉さんも違う意味で安らぎを求め、鯉を眺めている。

来年に期待しようよ。

「お、そうだ。餌あげなきゃ」

車の方に駆け出した姉さんは小さな袋を手に戻ってきた。

「ちよつとまった」

慌てて姉さんの動きを止める。

「なんだよ、大和」

「何を鯉にあげるつもりさ」

「ん、分かんない。うちの近くの池ですくった魚。小さいから食べるだろ」

「それたぶんブラックバスの稚魚だよ、入れたら池の中の生態系がめちゃくちゃになっちゃうよ」

姉さんは袋の中にいる黒っぽい小さな魚を覗き込んだ。

そして数秒考えた後、

「まあいいや」

の五文字で危険物を池に放流しようとする。

僕は姉さんを止めながら、子供にいい聞かせるように言った。

「将来的に鯉が食物連鎖の餌食になるからやめてあげて」

「ええい、うるさい。恋するものは誰にも負けない！つまり鯉にも敵はなし！勝利をその手で掴んでみせよ！」

「魚にはエラしかないから無理だよ、やめて姉さん」

僕は姉さんを取り押さえ、姉さんの（購入する直前まで僕のだった）おやつのおせんべいを小さく砕いて池に投げてやることにした。

それにしても、広い家だ。

廊下は長く、部屋だって何室あるのか検討もつかない。

僕はいくつものふすまを開けながら、どんどん奥へと進んでいく。物は少ないが、どの部屋にも掃除が行き届いているようだ。

僕は一際派手なふすまをゆっくりと開いた。

そこはかぐやが衣装に着替えている部屋だった。

下着姿のかぐやをまじまじと見てしまう。

パンツに・・・うさぎの絵？

なんだそれ、かぐやⅡ月Ⅱうさぎってか？

「きゃっ」

「うわっ」

僕は一瞬で我に返り、かぐやが叫ぶ前に慌ててふすまを閉める。

「ごご、ごめんなさい大和くん。着替えるのに手間取っちゃって。

あのあの」

「馬鹿！着替えるんならこう・・・馬鹿！」

とりあえず逆ギレした僕は、かぐやをけなしてその場を離れた。

あーびっくりした。

いまだに心臓がばくばくと脈打っている。

落ち着こうとしてもなかなか鼓膜から心臓の鼓動が離れない。

このドキドキは一体何なのか。

えーっとあれだ。かぐやが叫んで姉さんが僕を殴りに来るかと思っ
たーのドキドキだ。

決して・・・その・・・かぐやが子供の時から変化していたのでび

つくりした訳じゃない。

頭を冷やそう。

僕は来た道に戻り、廊下へと続くふすまを開いた。

「うわ！」

またびっくりした、さっきとは違う意味で。

「お久しぶりっす」

「姉さん猿が家にあがってる。おばあさんの猿が挨拶に来てるよ。久しぶりだって、きっと姉さんの馬鹿友達だよ」

「落ち着け、大和。岩雄だ」

姉さんが後ろからおばあさんの格好をした猿のカツラをとってみせた。

見た事のある顔、ちょうど二ヶ月前くらいに。

ああ、そうだ。何処の猿かと思えば岩雄くんじゃないか。

「ああ、久しぶり。でも何て格好してるの？」

「はい、自分はおばあさん役らしいので」

岩雄くんは着物の帯をさすりながら、恥ずかしそうに言った。

「へ？」

いまいち状況のつかめない僕は姉さんを見る。

「姉さんが呼んだの？」

「ああ、私が呼んだぞ。岩雄のギャラは安くすむからな」

姉さんはいきなり本人の前でぶっちゃけた。

僕は少し考え込み、

「あーもしかして岩雄くん、まだ猿として登録されてるんだ」

と姉さんに返す。

「人間の役者を雇うより全然安いからな、しかもこいつ果物送ってくれただろ」

何がしかものか分からないが、そういえばそんな事もあったな。

姉さんは食べ物の恩と恨みだけはしぶとく覚えている。

まあ、果物は姉さんがすべて食べて、僕は歯磨き粉しか口にしてないけど。

確かあの果物は南国の・・・どこだったかな。

よく見れば岩雄くんの肌は少しやけているようだった。

「少し焼けてるね、岩雄くん。何処の国に行ってたの？」

「はい、ある有名な民族のいる国に行ってたんですけど、もう少しで貢物として神様に捧げられるところでしたよ」

岩雄くんはまいったまいったと、頭をかきながら笑った。

「大変そうだねえ」

「でも撮影なら、いつでも呼んでください。梅さんが呼ぶならいつでもだって駆けつけますから」

岩雄くんは姉さんにウインクをしながら言った。

しかし残念、姉さんは見ていない。

そこにかぐやが着慣れぬ着物で入ってきた。

「ちゃんと着れてるかな、お姉ちゃん」

「いいんじゃないか。どうだ、猿。かぐや可愛いだろ？」

「うお！梅さんこの方誰ですか！？」

猿のテンションが急激にあがった。

「ああ、言ってなかったな。こいつかぐや。で、こっちが猿」
簡単すぎる説明を両者にする姉さん。

「かぐやさんか、可憐だ」

「えっと・・・おさるさん？」

かぐやの頭の上にクエスチョンマークがいくつも並ぶ。

「自分岩雄ッス よろしくおなしゃす」

「あ、はい。よろしく願います」

背と声の大きさに圧倒されて、少しおびえているかぐや。

その様子を見ていた僕とかぐやの目が合う。

さっきかぐやが着替えているところを偶発的に、事故で、間違えて、覗いてしまったこともあり、僕はかぐやの顔を直視することができずにうつむいた。

かぐやも顔を引きつらせている。

「じゃあ全員着替えた事だし、かぐや一家の家族写真撮るぞ」

そういつて姉さんは、三人を並ばせてカメラの前に立たせる。

「おい、大和とかぐやもつと近づけ、入らないぞ。猿、お前は近づきすぎだこの馬鹿」

僕はしようがなく2歩3歩横にずれた。

「よし、撮るぞ。秒読みー」

「ん、3・2・1」

「じゃあ猿、お前はすぐ着替えて来い」

「おっす、梅さん」

岩雄くんは慌ててカツラをとりながら部屋を出て行った。

おばあさんだけ衣装変えるのかな。

「大和ちよつとこっちこい」

姉さんが手招きして僕を呼び寄せる。

「何、姉さん」

「次のシーンで男が持ってきた無理難題のお宝を出すだろ。それで何を用意すればいいのか分からなかったから色々候補を持ってきたんだ。だから大和、見て選んでくれ」

姉さんは持参した箱の中をごそごそとさぐり僕の目の前に並べ始める。

「え・・・いいけど・・・何これ」

「ああ、これな。これは5人組の女子高生バンドが出てくる映画の半券と引き換えにもらえる生フィルムだよ。んでこれが当たりフィルム」

姉さんはどうにか絵を見せようとしているが、部屋が暗くてよく見えない。

「これは駄目だよ。こんなの写真に写らないし」

「そうか？じゃあ次、プロ野球選手のサインボール」

姉さんは少し汚れて茶色くなったボールを投げてよこす。

「これ誰のサイン？」

「ええつとたしか、なごしまの息子だったかな」

「その人のボールはあんまり価値ないんじゃないかな・・・、ていうか流石に無理あるでしょ。お宝っていったらもっと古くてさ・・・」

その言葉を聞いて、姉さんは箱の中をまた探り始める。

「んー、あった。すげー古いエロ本」

「姉さんまじめにやって」

「んじゃこれだな」

最後に出てきたのは、星のマークが3つ入っているオレンジ色のボールだった。

「これは全部集めると竜が一つ願いを聞いてくれるっていうあれじゃないの？」

猿のような野菜っぽい人が血眼でこのボールを探し回るアニメが昔流行ったのだ。

たぶんそのアニメのおもちやだろう。

演者の中にも猿っぽい人はいるけど、あれは女の姉さんに一発でなされるほど弱かった。

「まあそうだけど。なんか宝っぽいだろ、光ってるし玉だし」

「んー、そうだね。もうこれでいいんじゃない？」

「できたっす」

調度いいタイミングでふすまを開けた岩雄くんが今度は武士の格好で出てきた。

「これは？」

「こいつ一人二役。求婚する若い武士もやってもらうと思ってる」

「いやいや、どう見たっておばあさんと同じ顔でしょ」

正確には同じ猿だろ。

「うるせえいいんだよ、誰も気がつかないって」

「おーい、かぐやーいいかー？」

先ほどよりもっとあでやかな着物に着替えたかぐや。

「よし、撮るぞ。大和、猿にあれ渡しとけよ」

「はい、岩雄くんこれ」

「なんすか、これ。あつ、覚えてますよ。懐かしいなー」

「やっぱり岩雄くんも見てた？」

「はい、僕昔から背が高かったんで、ごっこ遊びはいつも大猿の役ばかりやらされてましたよ」

ああーそれは身長とは関係ないんじゃないかな。

「大和と猿、何してんだ撮るぞー。かぐや、もっと悲しそうな顔しろー、おら猿。ボール置いて、頭下げろや大和秒読みー」

なんだかりズムで僕の名前が呼ばれている気がした。

「はいはい、3・2・1」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8717y/>

smile

2011年12月6日06時55分発行